

株式会社山田製作所 5年後の理想像

2012年12月26日、年末の慌ただしい中、第2次安倍内閣が発足した。大型の緊急経済対策や、2%のインフレ目標を明記した政府と日本銀行の共同声明を決定するなど、最優先課題の「経済再生」に向けた政策を矢継ぎ早に打ち出してデフレ状況から抜け出すための施策を打ち出した。その効果はアベノミクスと賞賛され雰囲気牽引する形で効果はあったのだが、しかし2段階の費税増税までだけの勢いだけで、駆け込み需要に沸いた活況は増税後の反動で厳しい情勢にもどってしまった。そのような経済環境だがやっとこの1年前あたりから政権の安定や中小企業に向けた活性化策にて少しずつ景気は上昇気配が見えてきている。継続的に交渉を続けてきたTPPに関しては、2前締結されたが日本経済に及ぼす影響はまだ未知数である。

7年前に東日本を襲った巨大地震、津波の爪痕は、今もなお残っている。福島県原発事故周辺地域においては、まだ7年前から時間が停止した町が存在する。でもそのような状況から少しずつだが以前の街の姿に戻ろうと復興の火は灯り続けている。その原動力は地域の中小企業であり、特に中小企業家同友会企業の奮闘は関西にいる私たちにも勇気と元気を発信し続けてくれている。その被災地の中で津波により壊滅的被害を受けた三陸の漁港に目を向けると、カツオやサンマの水揚げがかつての量に戻り活気が戻っている。大船渡をはじめ被災を受けた漁港では、山田製作所が協力したスラリー製氷機が大船渡、野田村、女川をはじめ計10ヶ所で活躍している。そして本格的な大型スラリー製氷装置もこの春に製作にかかりだす。

2018年1月5・6・7日と、昨年完成したグアムの保養所にて、12月の経営会議で経営幹部から提起された方針について経営方針展開会議が全社員25名参加の下、侃々諤々と論議された2日後の火曜日のお昼休みである。

新大阪食品産業さんからの派遣スタッフに調理していただいた温かい昼食を頬張る顔は、みんな笑顔がまぶしく、笑い声が響き渡っている。売上5億円と経常利益2千5百万円という今期の目標は、12月の数字からすると達成確実のレベルに達している余裕なのかもしれない。

暖かい太陽の日差しが3年前に完成した新しい本社工場の屋上に取り付けられた太陽パネルに降り注いでおり、電気の20%をその太陽光発電で補っている。屋上の一角には、まもなく訪れる春を待つ、花々の種が蒔かれた緑地が広がり、食事を終えた技術系女性スタッフ2名と総務経理担当の女性スタッフ2名が小さなスコップやじょうろを手に、冬に咲くパンジーの手入れを行う姿や楽しげに話す姿が見える。室内では社内LANにつながった1人1台所有のタブレット式パソコン端末で午前中の記録や午後の予定などをチェックしている姿やインターネットを楽しむ姿があり、会社敷地内に立てられた厚生棟のスポーツスペースに目を移すと、ベテラン4名ほどが、トレーニングマシーンで体力づくりに勤しんでいる姿が見える。若手社員達は、駐車場横のバスケットボールゴール板でミニバスゲームを楽しみ、また野球部は、隣接する市民グラウンドにバット、グラブを抱え張り切って走り出した。就業後はシャワールームで汗を流し、AVルームで最新の映画を鑑賞する…。仕事を通じて自己を高める文化型企業を理念とする山田製作所の文化が色々な場面でしっかりと根付いているようだ。

入社5年以上の社員は、週休2日制の週末2日と有給休暇を利用した9日間の連続休暇が4年前社内規定で設けられ、対象者のほとんどが家族での海外旅行を計画し実施して見聞を広めている。

1階と2階の工場エリアは、柱の無いワンフロアで、工場中央を入口から奥まで伸びる安全通路を基準に作業定盤がレイアウトされ、工場の奥側では最新鋭の板金機械が設備され省力化と最速の加工スピードが実現している。溶接工程ではデジタル化されたマシーンでデータに基づく工程が推進している。主力製品の扉は、材料の搬入から切断・曲げまで加工できるロボットが導入され、若手4人が中心となり製造している。

この新工場の竣工に当たっては、若手社員の意見が随所に取り入れられ、如何に製品を停滞無く次工程に進められるかを、最重点に構築されている。工場全体が大きなU字ラインで出来上がり、個々の工程でも小さな生産セルが組めるようにフレキシブルなレイアウトが可能な小機械も待機している。現場事務所や数箇所あるミーティングルームは透明のガラス張りで囲まれすべてが見渡せるように配置されて、働きやすい環境作りのために冷暖房完備はもちろん、トイレはホテルのようなこだわりの設計が行われた。

新入社員の指導を9年前に入社した社員が担当しており、ホッパーやタンクなど数年前まではベテラン社員が製造していた製品も彼らが主軸となり進めている。この5年ほどで高い技術力・技能を習得しただけでなく、展開や営業、見積りの知識まで持つようになった。

社員全員が自家用車で通勤可能な駐車場に隣接する厚生棟には、フリースペースやスポーツジムとサウナが装備され、休日には地域の方々にも開放されて、当社の社員やその家族、友達に混じって地域に働く方々や住まれる方々も集まり、地域のコミュニティとして大切な役割も担うようになっている。それらの活動が評価され、国や大阪府より品質マネジメントシステムと環境経営システムに関するモデル工場、住工調和モデル企業、人材育成モデル企業、社会的貢献モデル企業として認証表彰を一昨年受賞した。

中国市場との取引も本格化してきた。産業用機械はまだ日本製が求められている。なぜならやはり品質の違いだろう。ただしここで求められる品質とは設計時の打合せから納入後のアフターフォローまでのきめ細かな対応も含む意味合いがある。この品質対応は日本しか対応できないものであり、まさしく山田製作所の強みが世界から求められているのである。

大学と連携して開発する大阪新エネルギー機器開発プロジェクト事業団のメンバーに選出され、社員1名が1年間出向してそれに携わっている。このプロジェクトが完成すれば地図に残るような大きな仕事に社員全員が達成感を味合うに違いない。先日、経済産業大臣も激励に駆けつけてくれた。

向いの第二工場では、25Mまでの機械システムが組み立て可能で、絶えず2ラインの注文が入り組立作業が行われている工場だ。そこでは、ベテラン、中堅、若手社員の混合チームが4チーム組織されお互いが協力し合いまた切磋琢磨し合い徹底した3Sを基に「理にかなった生産の仕方」「理にかなった管理の仕方」を追求している。そこには70歳に近づく大ベテランの姿も見える。

この5年間は、その社員達の手によって製缶板金に関わるモノづくりの管理を発展させ、ドライバーと医療機器分野に関するスキルを更に飛躍させる努力を怠らなかつた。そして現在山田製作所は、ステンレス板の加工では日本中の信頼を誇る企業として君臨し、化石燃料に変わるエネルギーを効率よく発生させるための素材を生産するラインの製造を設計も含め産業機械メーカーから依頼を受け製造している。

数日前、NHKの「プロフェッショナル」で我々の「徹底した3S工場」が紹介された。13年前より毎年200社を超える見学を迎え、海外の管理者を支援する団体の見学も13年目を迎えた。全て、“社員全員で築き上げた社風”を学びに来て下さる。そして19年もの間、積み重ねてきた3Sの活動が日本各地で評価され本業と共に、自他が認める有名企業となった。

「私たちの社風が、今の日本に一番必要な文化なのかもしれませんね…そしてそれが、子供達に誇れる大切なことなのですね…」と、今春入社してくる大学卒2名と高校卒3名の新入社員研修を担当する8年前に入社した総務経理担当社員が企画作りに取り掛かりながらブログに書き込んでいた。

社員全員の意見から抽出しストーリーまとめたものです。